

トルコにおける近年の地理教育の動向 (2)

—中学校・高等学校の教科書を手がかりに—

西脇保幸*

Turkey's Geographic Education in Textbooks for Middle Schools and Lycees(2)

Yasuyuki NISHIWAKI

目 次

- I はじめに
- II 地理教育カリキュラムの変遷
- III 教科書にみる中学校の地理教育
- IV 教科書にみる高等学校の地理教育 (以下本号)
- V おわりに

IV 教科書にみる高等学校の地理教育

高等学校については1987/88年度改訂で、地理は普通高校の理科系では第2学年と第3学年で選択教科となったり、職業高校では履修させないようにするなど、履修上大きな変更があったものの、内容の点では従前のカリキュラムが踏襲されている。したがって、本論ではこの80年代の教科書と、主に1991/92年度から導入された単位制教育課程で使用されている教科書とを検討することで、高等学校における地理教育の動向を考察したい。単位制教育課程においては、地理は必修教科の「地理1」「地理2」と、選択教科の「トルコ地理」「トルコ人文および経済地理1・2」「世界地誌」が設定されているが、本論では入手ができなかった「トルコ地理」については言及していない。なお、1993年発行の教科書から検定制度が復活したので、本論においても80年代については国定教科書が、90年代の単位制教育課程については検定教科書が分析の対象となる。

1. 『高校地理 I (Liseler için Coğrafya I)』(1986年発行, 277ページ), 『高校地理 II』(1986年発行, 220ページ) および『高校地理 III』(1986年発行, 215ページ)
本書は単位制教育課程以前の国定教科書であり、内容構成は以下のようになっている。

『高校地理 I』

- 序 地理の主題、諸部門と発達
 第1課 地理の主題と諸部門 第2課 地理の発達
 *「トルコ人は地理を重視したのである」
- 第1単元 地球と宇宙
 第3課 太陽系、地球の形、地球の面、緯線・経線・緯度・経度 *「宇宙の研究」
 第4課 地球の運行とその帰結 第5課 トルコの地理的位置
- 第2単元 地図の知識
 第6課 地図と縮尺 *「トルコにおける近代的な地図製作」「地図投影法は地理に重要性をもたらす」「空中写真からの地図の作製」
 第7課 トルコの面積、国境と海岸
- 第3単元 大陸と海洋
 第8課 大陸とその分布、海洋とその分布、海底地形 *「島は世界の非常に重要な陸地の一部である」
 第9課 トルコの海と海峡
- 第4単元 気候
 第10課 大気とその特徴、気候の定義・気象観測と気候要素 第11課 気候要素：温度・気圧・湿度 第12課 風 第13課 トルコにおける気候要素
 第14課 トルコで吹く主な地方風 第15課 世界の主な気候型と自然植生
 第16課 トルコの主な気候型と自然植生 第17課 トルコの内陸地域の大陸性気候
- 第5単元 地球の構造と地形の形成
 第18課 地殻の構造、地殻の構成物質、地球の内部構造、地質の年代 第19課 内的営力
- 第6単元 外的営力
 第20課 岩石の風化、岩屑の移動と滑落、土壌侵食 第21課 表流水、地下水と水源
 第22課 湖沼とその形成 *「ヴァン湖は、トルコ最大の自然の湖である」
 第23課 氷河、トルコの風食地形、海での作用
- 第7単元 人類と自然環境
 第24課 世界の人口動態とその帰結 第25課 トルコの人口動態とその帰結、トルコにおける居住

『高校地理 II』

- 第1部 トルコの諸地域
- 序
 第1課 地域・地方・地区の概念、地域を成立させる条件 第2課 トルコの行政区画
- 第1単元 黒海地域
 第3課 本地域の地理的特徴、本地域の諸地方 第4課 本地域の諸地方

(続き), 本地域のトルコ経済における位置, 本地域のトルコ観光における位置
* 「サムスン, アタチュルクが祖国解放戦争を始めるために立ち寄った都市である」

第2単元 マルマラ海地域

第5課 本地域の地理的特徴, 本地域の諸地方 第6課 本地域の諸地方
(続き), 本地域のトルコ経済における位置, 本地域のトルコ観光における位置
* 「イスタンブルの“ボスポラス橋”は近代技術の労作である」「両海峡はトルコや世界規模で戦略上及び経済上大きな価値がある」

第3単元 エーゲ海地域

第7課 本地域の地理的特徴, 本地域の諸地方 第8課 本地域の諸地方
(続き), 本地域のトルコ経済における位置, 本地域のトルコ観光における位置
* 「イズミルが占領されたことは, 敵の欲望と祖国侵略の危険性を示すものであった」

第4単元 地中海地域

第9課 本地域の地理的特徴, 本地域の諸地方 第10課 本地域の諸地方
(続き), 本地域のトルコ経済における位置, 本地域のトルコ観光における位置
* 「ハタイ県の祖国復帰は, トルコ史の輝かしい1ページである」

第5単元 内アナトリア地域

第11課 本地域の地理的特徴, 本地域の諸地方 * 「トルコの首都アンカラは急速に成長した」 第12課 本地域の諸地方 (続き), 本地域のトルコ経済における位置, 本地域のトルコ観光における位置 * 「シバス会議でトルコ共和国の基礎が築かれた」

第6単元 東アナトリア地域

第13課 本地域の地理的特徴, 本地域の諸地方 * 「エルズルム会議」
第14課 本地域の諸地方 (続き), 本地域のトルコ経済における位置, 本地域のトルコ観光における位置

第7単元 南東アナトリア地域

第15課 本地域の地理的特徴, 本地域の諸地方 * 「トルコは, 需要の一部をまかなうほど石油を出す」「GAP (南東アナトリア計画) は南東アナトリアに豊かさをもたらす」 第16課 本地域の諸地方 (続き), 本地域のトルコ経済における位置, 本地域のトルコ観光における位置 * 「トルコの労働力, 鉱物やエネルギーの潜在力は大変な規模のものである」「我々の国土の資源を守ることは, 祖国の義務である」

第2部 諸国

第1単元 中東の主要国

第17課 イラン, アフガニスタン, イラク, シリア, レバノン, ヨルダン
第18課 イスラエル, サウジアラビア, クエート, アラブ首長国連邦, キプロス, エジプト, リビア * 「独立と自由の戦いで, 多くの国がトルコのA

タチュルクの指導における祖国解放戦争を見本とした」

- 第2単元 バルカン半島の国々
 第19課 ブルガリア, ギリシア 第20課 ルーマニア, ユーゴスラビア,
 アルバニア * 「トルコ人がバルカン諸国に存在する理由」 「バルカン半島
 では, トルコ=イスラム文化の伝統や風習の影響がはっきりしている」
- 第3単元 ソ連
 第21課 ソ連
- 第4単元 アフリカの主要国
 第22課 チュニジア, アルジェリア, モロッコ, ナイジェリア, 南アフリカ
 共和国
- 第5単元 アジアの主要国
 第23課 パキスタン, インド, バングラデシュ 第24課 マレーシア, イ
 ンドネシア 第25課 中華人民共和国, 日本, 韓国

【高校地理 III】

第1部 トルコの経済地理

序

第1課 トルコの経済地理に影響を及ぼす諸条件 * 「トルコは, 将来は平
 穏で強力な国家である」

第1単元 トルコの農業

第2課 農業のトルコ経済での位置, トルコ農業に影響を及ぼす諸条件

第3課 トルコの土地利用, トルコの農業地域, 耕地と園芸 * 「食料を無
 駄にしないで利用することが国の義務である」 第4課 耕地と園芸(続き),
 果物栽培 第5課 オリーブ栽培, ブドウ栽培, 飼料作物, 茶, 花卉栽培な
 ど

第2単元 トルコの牧畜業

第6課 牧畜業のトルコ経済での位置, 牧畜業に影響を及ぼす条件 第7課
 トルコの主な家畜とその分布 第8課 水産業

第3単元 トルコの森林と林業

第9課 トルコの森林の地理的分布, 林業のトルコ経済での位置, 森林の利用
 と林産物, 森林の重要性と保護, 植林

第4単元 トルコの鉱産資源とエネルギー資源

第10課 鉱業のトルコ経済での位置, 主な鉱産物 第11課 主な鉱産物
 (続き) 第12課 エネルギー資源 第13課 エネルギー資源(続き)

第5単元 トルコの工業

第14課 工業立地の必要条件, トルコにおける工業の建設と発展, トルコに
 おける工業の諸部門 第15課 トルコにおける工業の諸部門(続き), 工業
 のトルコ経済での位置 * 「アタチュルクは, 我々の経済問題でも指導者で
 あった」

第6単元 トルコの交通

第16課 トルコの交通に影響を及ぼす自然・人文条件，トルコの陸上交通

* 「ボスポラス橋はヨーロッパと中東を結ぶ最大の橋であり，近代技術の労作である」 第17課 トルコの海上交通，トルコの航空交通と我々の空

* 「トルコの造船は重大な発展を示した」

第7単元 トルコの交易

第18課 国内交易 第19課 貿易，通過貿易

第8単元 トルコの観光

第20課 トルコの世界観光での位置 第21課 観光のトルコ経済での位置，手工業

第2部

第1単元 ヨーロッパの主要国

第22課 南ヨーロッパ，中央ヨーロッパ，西ヨーロッパ，北ヨーロッパ

第2単元 新大陸

第23課 北アメリカ 第24課 南アメリカ，オーストラリア

第3単元 国際組織とトルコ

第25課 国際連合，NATO，ワルシャワ条約，OECD，欧州会議，EEC，COMECON * 「国連組織の基盤」「NATOの基盤」「ワルシャワ条約の基盤」「EECの発展」 * 「様々な国でアナーキーやテロが時々発生している」

注) * 「 」の中は，囲み記事の題名。以下の教科書も同様。

本教科書では，まず『高校地理Ⅰ』で宇宙の中の地球，地表を取り巻く自然環境とその形成が自然地理学の成果に基づき説明されている。『高校地理Ⅱ』では，前半でトルコの国内地誌が扱われ，後半では世界地誌のうち周辺の国々と，アジア・アフリカの主要国が取り上げられている。そして『高校地理Ⅲ』では前半でトルコの経済地理について，後半で世界地誌の残余部分である欧米諸国地誌と国際組織について，それぞれ記載されている。高等学校でも中学校と同様トルコ地理の知識・理解が中心であり，それを補充するように，トルコ地理の背景をなす自然環境に関する学習と，中学校で十分取り上げられなかった世界地誌の学習が行われている。高校においても国土認識に主眼を置いた地理教育が行われていたのである。以下で，学習内容を具体的に確認し，その教材内容のもつ意味を検討したい。

『高校地理Ⅰ』の「序」では，地理とはどのような学習であり，どのような分野があるのかを説明するとともに，古代から近代に至るまでの地理的視野の拡大が概説されている。第2単元の地図理解も，「序」と同様中学校での学習とほぼ同一の内容であり，高校地理が中学校の繰り返しとなっている。

第2単元を除き，第1単元から第6単元までは，自然環境を自然を構成する要素から系統的に学習させている。とりわけ第1単元や第5単元は，日本では理科の地学で扱われる

内容であるが、自然環境を系統的に学習する場合には、言及されなければならない項目であろう。生活の舞台としての自然環境と言うよりも、自然現象のメカニズムを理解させることに主眼が置かれていると考えられる。それでも、この『高校地理Ⅰ』が、『高校地理Ⅱ』から始まるトルコ地理学習の前提的な意味をもたせるべく、それぞれ自然現象の一般論が説明されたあと、トルコにおける当該の現象が言及されていることは、注目に値しよう。第7単元はタイトルでは、地人相関論を考察させるような項目であるが、実際にはトルコにおける人口動態や人口分布が主な内容となっている。第7単元で地人相関論や環境問題が扱われるようであるならば、『高校地理Ⅰ』はまさに自然環境に焦点化された学習となるはずであった。しかし、ほぼトルコの人口についての知識・理解に終始する第7単元も、トルコ地理の人文的学習の予察となることを考慮すると、『高校地理Ⅰ』はトルコ地理学習の前提的な意味合いが大きいと判断できる。

前半がトルコ地誌から構成される『高校地理Ⅱ』は、第1単元の地域概念の扱いを含め、中学校の学習と同一の方式であり、より詳細な内容が記載されているにすぎない。すなわち、7大地域についてそれぞれまず地域全体の特徴として、各地域の位置と領域、地形・気候・植生といった自然環境、人口と経済活動の概況が確認されている。地域により若干の差はあるものの、概して自然環境についての説明に重点が置かれている。地域全体の特徴についての説明の後で、それぞれの地域を構成する諸地方、そしてトルコ全体の中でのそれぞれの地域の経済的役割、とりわけ観光地域としての現状が紹介されている。中学校における地理教育の動向と同様、観光産業推進政策に呼応して、観光についての知識・理解を重視している状況が把握できる。

各地方は地域と同様静態地誌の手法で、自然環境、人口・主要都市と経済活動の順で記述されている。地方によって異なるが、概して都市に関する記述の比重が高く、大都市について言及される場合は、併せて経済活動の説明がなされることが多い。

後半の世界地誌も、取り上げられている国ごとに国内地誌とはほぼ同じ項目と順序で、静態地誌の手法で記述がなされている。ちなみに、日本については、極東の島国であること、火山国で地震が多いこと、モンスーンに見舞われること、主な農産物、森林資源が豊かであること、水産業が盛んであること、地下資源に恵まれないが近代工業が発達していること、トルコとの経済的関係が増大していることなどが、この順序で紹介されている。

『高校地理Ⅲ』の第2部で欧米諸国の地誌が記載されているが、本書ではその大部分の記述が第1部のトルコの経済地理にあてられている。トルコの経済地理については中学校の地理でも学習するが、中学校と異なり、「序」でも学習させているように、立地条件や歴史的背景をも考察させるようにしており、学習の深まりをもたせている。中学校の経済地理学習が現象を紹介するだけの経済地誌的な扱い方をしているのに対して、高校では因果関係を重視し、分析的な思考を視野に入れていることは、注目に値しよう。

『高校地理Ⅱ』を中心に、ナショナリズムを高揚させる囲み記事が設定されていることも、注目できる。1919年7月に開催されたエルズルム会議は、トルコ革命につながる祖国解放戦争の基礎となったが、これを説明した「エルズルム会議」をはじめ、共和国成立期の歴史的的事象に関する記事がみられる。また、ボスポラス橋のような現在のトルコが誇

れる事物についての説明記事もあるし、トルコ人としてのアイデンティティの育成を助長する国外のトルコ人に関する説明もある。これらの囲み記事は、国土認識に主眼が置かれている高校地理教育の象徴でもあり、それを補強するものでもあると考えられる。

2. C.シャヒン (Şahin) 著『単位制教育課程による高校地理 1 (Liseler için Ders Geçme ve Kredi Sistemine göre Coğrafya 1)』(1994年発行, 159ページ) および同著『単位制教育課程による高校地理 2』(1995年発行, 160ページ)

本書は、5年間「地理1」「地理2」用教科書として認定されたものであり、内容構成は以下の通りである。なお、出版社はDers Kitapları Anonim Şirketi (イスタンブル) である。

C.シャヒン著『単位制教育課程による高校地理 1』

- 序 地理の主題と諸部門
* 「現代地理の理解と教育」
- 第1単元 地球
1) 宇宙での地球の位置 2) 地球の運行とその帰結 * 「宇宙研究と地理」
- 第2単元 地図の知識
1) 地図と縮尺 2) 地図における地形の表現
- 第3単元 気候
1) 大気とその特徴 2) 気候と気候要素 3) トルコにおける気候要素
4) 世界の主な気候型と自然植生 * 「オゾン層」 * 「人工降雨」
- 第4単元 地球の構造とその物質
1) 地殻の構造 2) 地殻の物質：岩石 3) 地球の内部構造 4) 地質時代
- 第5単元 地形を形成する内的営力
1) 山地の形成 (造山運動) とトルコにおける山地の形成 2) 造陸運動とトルコにおける造陸運動 3) 火山活動とトルコにおける火山 4) 地震, トルコにおける地震と対策 5) トルコの平原と高原 * 「高原-夏の放牧地」
- 第6単元 地形を形成する外的営力
1) 岩石の風化, 土壌の生成とトルコにおける主な土壌の種類 2) 土砂の流出と移動 * 「我々の祖国にとって重大な自然災害：地滑り」 3) 土壌侵食 4) 表流水 5) トルコにおける地下水と水源 6) トルコにおけるカルスト地形の水, 侵食地形と堆積地形 7) 湖沼とその形成 8) トルコにおける氷河と氷河地形 9) トルコにおける風食地形 10) 海的作用
* 「ボスポラス海峡とダーダネルス海峡」

C. シャヒン著『単位制教育課程による高校地理 2』

序 世界でのトルコの位置と重要性, 地域・地方・地区の概念, 地域を形成する諸要素, トルコの行政区分

* 「中東」

諸地域

第1単元 黒海地域

1) 本地域の一般的地理的特徴 2) 本地域内の諸地方 3) 本地域のトルコ経済での位置 4) 本地域のトルコ観光での位置 * 「黒海とその影響」

第2単元 マルマラ海地域

1) 本地域の一般的地理的特徴 2) 本地域内の諸地方 3) 本地域のトルコ経済での位置 4) 本地域のトルコ観光での位置 * 「マルマラ海」

第3単元 エーゲ海地域

1) 本地域の一般的地理的特徴 2) 本地域内の諸地方 3) 本地域のトルコ経済での位置 4) 本地域のトルコ観光での位置 * 「エーゲ海」

第4単元 地中海地域

1) 本地域の一般的地理的特徴 2) 本地域内の諸地方 3) 本地域のトルコ経済での位置 4) 本地域のトルコ観光での位置 * 「土地利用」

第5単元 南東アナトリア地域

1) 本地域の一般的地理的特徴 2) 本地域内の諸地方 3) 本地域のトルコ経済での位置 4) 本地域のトルコ観光での位置 * 「GAP (南東アナトリア計画)」

第6単元 東アナトリア地域

1) 本地域の一般的地理的特徴 2) 本地域内の諸地方 3) 本地域のトルコ経済での位置 4) 本地域のトルコ観光での位置 * 「水力の潜在力」

第7単元 内アナトリア地域

1) 本地域の一般的地理的特徴 2) 本地域内の諸地方 3) 本地域のトルコ経済での位置 4) 本地域のトルコ観光での位置 * 「内アナトリアにおける早魃ーコンヤ平原開発計画 (KOP)」

本教科書の構成は、基本的には『1』の自然地理学習と『2』のトルコ地誌学習からなっている。単位制教育課程では、選択科目として「トルコ人文および経済地理1・2」や「世界地誌」が設置されているので、系統的な経済地理学習や世界地誌学習の領域についてはそこで学ぶことになっている。したがって、本書による学習内容構成は、国定教科書の方式を受け継いだ形態をとっている。とりわけトルコ地誌については、単元の配列がほぼ同一であるばかりか、単元の構成や地域・地方の静態地誌による記述の手法など、ほとんど国定教科書を踏襲している。以下では、主に国定教科書との差異を中心に教科書分析を試みることにする。

『1』の序の囲み記事「現代地理の理解と教育」では、単位制教育課程における地理教

育の在り方が紹介されている。それによると、以前の地理教育は、時とともに変化してしまふ知識を与えるだけのものであったために、嫌われ、重要性のないものとなっていた。そこで、新たな地理教育においては、1. 地理的事象の原因・分布・帰結を論じ、その人間への影響を考察すること、2. 実際的な野外観察の実施や実験室の利用、3. 空中写真などの教材教具の利用、4. 世界中の国を網羅的に扱うのではなく、社会経済的に結びつきの強い国のみを扱うこと、5. 教科書は知識の倉庫のような役割ではなく、生徒の学習を方向付け、理解を確かなものにする、6. 国益となり、日々の生活で使用される必要な知識が教えられること、に留意されねばならないとしている。

地理教育についてのこのような決意とも言える事項まで記述してあることは、地理教育関係者の危機意識の現れとも解釈できる。しかし、後出のアイドゥン著教科書『1』の序においても、囲み記事で「何故地理を学ばなければならないのか」が記載されており、検定期になってから、高校教育における教科としての地理の存在理由が問題視され始めている証左とも考えられる。

自然地理学習領域の諸単位については、国定教科書と類似した単元間・単元内の構成方式を踏襲している。ただし、国定教科書の第3単元で扱われていた大陸と海洋の分布や海底地形に関する項目が、本書だけでなくアイドゥン著においても欠落しているため、検定教科書ではそれらについての知識・理解は単元をなしていないと判断できる。同様に、検定教科書では、国定教科書が第7単元として設定した人口に関する学習が欠落している。もっとも、単位制教育課程では選択科目として「トルコ人文および経済地理」が設置されており、その人文地理で人口の学習をするので、検定教科書では人口について言及する必要がないのである。

国定教科書と単位制教育課程の検定教科書との顕著な差異としては、教科書で使用される図表の違いが注目される。国定教科書では例外的にしか多色刷りのページがないが、検定教科書では多色刷りに改良されている。地理学習の性格からすれば、多色刷りの方がより視覚的に理解しやすいことは言うまでもない。写真が見やすくなったばかりか、挿図も説明的となり、とりわけ地形の形成過程の理解などには有効である。理解を深めるだけでなく、図表活用能力を重視し始めたものとも解釈できよう。

本教科書『2』のトルコ地誌学習領域の諸単位は、南東アナトリア地域・東アナトリア地域・内アナトリア地域の取り上げる順序こそ異なるが、地域や地域内の単位である地方の区分の方法と記述の方法に関して、国定教科書と同様であり、静態地誌による記述方法が採用されている。ただし、より詳細に分析すると、記述の配列に国定教科書との差異を見いだせる。国定教科書では各地域全体の特徴や各地方の特徴を、自然環境、人口・都市、経済活動の順で記述していたが、本書では若干異なる。各地域全体の特徴については、国定教科書と同様、自然環境の後で、人口、経済活動の順に記述される地域もあるが、逆に経済活動、人口の順に記述されている地域も散見する。後者の記述方法は、当該地域の自然環境に対応した経済活動が営まれ、その結果として人口分布が出現しているという環境決定論的な説明であるが、地域像を把握するうえでは理解しやすい。各地方についても、国定教科書と同様、自然環境、人口・主要都市と経済活動の順で記述されている地方もあ

れば、自然環境の後に経済活動の説明がなされ、それで終了したり、あるいはさらに人口・都市の記述が続いている地方もある。大都市を抱えている地方は、人口の説明の主要部分が都市の説明に充当されるので、前者の事例となることが多いが、顕著な都市がない地方については後者の手法が適用されている。国定教科書では、各地域や地方の諸相が紋切り型とも言える方法で記述されているに対して、本教科書では、地域の実状に応じた地域理解や地域像の把握が、より一層視野に収められていると判断できる。

本教科書においても国定教科書と同様、囲み記事が設定されている。ただし、国定教科書では、ナショナリズムを高揚するのが目的であると考えられるほど、トルコ人としてのアイデンティティの形成に直接的に関わる項目が列挙されていたが、検定教科書では、そのような強烈なアイデンティティの育成を意図していないと推察できる²⁾。例えば、「マルマラ海」では、黒海とエーゲ海を結ぶマルマラ海の海上交通路としての重要性や、漁業生産や観光における役割が紹介されるとともに、マルマラ海の汚染問題が取り上げられている。国定教科書のマルマラ海地域の囲み記事では「両海峡はトルコや世界規模で戦略上及び経済上大きな価値がある」と題して、位置的に重要なボスポラス海峡とダーダネルス海峡の管轄権をどのようにして共和国成立期に獲得してきたかを詳述しているが、本書ではそうしたナショナリズムは前面に出されていない。むしろ、海洋汚染という現代的な課題がトルコの経済活動において重要な位置にあるマルマラ海で生じていることを理解させることで、国土認識を深めさせアイデンティティ育成を図っていると判断できる。

3. C.アイドゥン (Aydın) 著『単位制教育課程による高校地理 1 (Liseler için Ders Geçme ve Kredi Sistemine göre Coğrafya 1)』(1993年検定, 126ページ) および同著『単位制教育課程による高校地理 2』(1993年検定, 135ページ)

本書は、5年間「地理1」「地理2」用教科書として認定されたものであり、内容構成は以下の通りである。なお、出版社はDoğan Yayıncılık (アンカラ) である。

C.アイドゥン著『単位制教育課程による高校地理 1』

- 序 地理のテーマと諸部門
- * 「何故地理を学ばなければならないのか」
- 第1単元 地球
- 1 宇宙での地球の位置 2 地球の運行とその帰結
- 第2単元 地図の知識
- 1 地図と縮尺 2 地図における地形の表現 3 地図の利用
 - * 「ピーリー=レイスの地図」
- 第3単元 気候
- 1 大気とその特徴 2 気候と気候要素 3 トルコにおける気候要素
 - 4 世界の主な気候型と自然植生 * 「気象の専門家は何故間違えるのか」
- 第4単元 地球の構造と地形の形成
- 1 地球の構造 (地殻の構造, 地殻の物質, 地球の内部構造, 地質時代)

* 「地底から来る音」 2 内的営力 (山地の形成とトルコにおける山地の形成, 造陸運動とトルコにおける造陸運動, 火山活動とトルコにおける火山, 地震・トルコにおける地震と対策, トルコの平原と高原) * 「海は上昇している」

第5単元 地表の形成 (外的営力)

1 岩石の風化, 土壌の生成とトルコにおける主な土壌の種類 2 土砂の移動と流出 3 土壌侵食 4 表流水 5 トルコにおける地下水と水源 6 トルコにおけるカルスト地形の水, 侵食地形と堆積地形 7 湖沼とその形成 8 トルコにおける氷河と氷河地形 9 トルコにおける風食地形 10 海的作用 * 「両海峡の規則と航行制度」

C. アイドゥン著『単位制教育課程による高校地理 2』

序 世界でのトルコの位置と重要性, 地域・地方・地区の概念, 地域を形成する諸要素, トルコの行政区分

第1単元 黒海地域

1 本地域の地理的特徴 2 本地域内の諸地方 3 本地域のトルコ経済での位置 4 本地域のトルコ観光での位置 * 「黒海における環境の悪化による水産物への影響」

第2単元 マルマラ海地域

1 本地域の地理的特徴 2 本地域内の諸地方 3 本地域のトルコ経済での位置 4 本地域のトルコ観光での位置 * 「イスタンブルは21世紀に向けて準備をしている」

第3単元 エーゲ海地域

1 本地域の地理的特徴 2 本地域内の諸地方 3 本地域のトルコ経済での位置 4 本地域のトルコ観光での位置 * 「トルコは果樹園である」

第4単元 地中海地域

1 本地域の地理的特徴 2 本地域内の諸地方 3 本地域のトルコ経済での位置 4 本地域のトルコ観光での位置

第5単元 南東アナトリア地域

1 本地域の地理的特徴 2 本地域内の諸地方 3 本地域のトルコ経済での位置 4 本地域のトルコ観光での位置 * 「南東アナトリア計画 (GAP) と農業」

第6単元 東アナトリア地域

1 本地域の地理的特徴 2 本地域内の諸地方 3 本地域のトルコ経済での位置 4 本地域のトルコ観光での位置 * 「アララット山 (アウル山)」

第7単元 内アナトリア地域

1 本地域の地理的特徴 2 本地域内の諸地方 3 本地域のトルコ経済

での位置 4 本地域のトルコ観光での位置 * 「中央アナトリアにおける植林の努力」

本教科書は、一瞥してわかるように、シャヒン著の教科書と同一の単元構成をなしている。シャヒン著では、地球の構造や構成物質に関する単元と内的営力に関する単元を別立てにしているが、本書ではそれらをまとめて第4単元としていることが、差異として指摘できる程度である。地誌の扱い方についても、単元、地域構成、記述方法までほぼ同一である。ただし、より厳密に考察すれば、記述の手法に若干の相違がある。本書では、各地域の全体的特徴で、国定教科書と同様、どの地域についても位置・領域、自然環境、人口、経済活動の順で記載されている。各地方については、ほとんどの地方で、自然環境、経済活動、人口・都市の順に記載されており、自然環境の後に人口・都市を説明して、経済活動に言及する例は少ない。シャヒン著とも国定教科書とも異なる方法が採用されている。囲み記事についてはシャヒン著と同じく、ナショナリズムを前面に打ち出すような内容は取り上げられていない。ただし、シャヒン著と同様各地域の記述にあたり、それぞれの地域にみられるトルコ革命期の歴史的偉業についての言及はなされている。このように、検定教科書とは言え、これだけ類似していることは、教科書の編集・記述についての制約が大きいことを示唆していると考えられる。なお、内容構成だけでなく、多色刷りの印刷や豊富な図解で理解を容易にさせている点でも、本書とシャヒン著との間に類似性をみることができる。

4. I. アタライ(Atalay)著『トルコの人文および経済地理(Türkiye'nin Beşeri ve Ekonomik Coğrafyası)1』(1994年発行, 176ページ) および同著『トルコの人文および経済地理2』(1995年発行, 191ページ)

本書は、5年間「トルコ人文および経済地理1・2」用教科書として認定されたものであり、内容構成は以下のとおりである。なお、出版社はİnkılâp Kitabevi (イスタンブル)である。

I. アタライ著『トルコの人文および経済地理1』

第1部 トルコにおける人口

序

第1単元 トルコの人口

- 1 トルコにおける人口と人口統計 2 人口増加とその結果 * 「トルコにおける人口増加と諸問題」 3 トルコにおける人口の地理的分布とそれに影響を及ぼす諸要因 4 人口密度 5 トルコ人口の諸特徴 * 「トルコの発展における人口の要因」

第2単元 トルコにおける人口動態

- 1 人口増加とそれに影響を及ぼす諸要因 2 移動 * 「トルコにおける移動の原因と結果」

第2部 トルコにおける居住

序

第1单元 トルコにおける居住

- 1 トルコにおける居住の略史
- 2 トルコにおける居住の形態
- 3 都市の発展と諸問題
- 4 トルコにおける住居のタイプ * 「トルコにおける散在する居住と諸問題」

I. アタライ著『トルコの人文および経済地理2』

序 トルコの経済に影響を及ぼす要因

- * 「トルコにおける地表面の経済への影響」

第1单元 トルコにおける農業

- 1 トルコの土地利用
- 2 トルコの農業に影響を及ぼす諸要因
- 3 耕地と園芸
- 4 トルコ経済における農業の位置と重要性 * 「誤った土地利用と農地の損失」

第2单元 トルコにおける畜産業

- 1 畜産業に影響を及ぼす諸要因
- 2 トルコにおける家畜とその地理的分布
- 3 水産物 * 「移牧」

第3单元 トルコにおける森林と林業

- 1 トルコの森林の地理的分布
 - 2 森林の利用と林産物
 - 3 植林
 - 4 森林の重要性と保護
 - 5 トルコ経済における林業の位置と重要性
- * 「森林と農業は、我が国の将来のために何故非常に重要なのか」

第4单元 トルコにおける鉱産資源とエネルギー資源

- 1 鉱産資源
- 2 エネルギー資源
- 3 鉱業とエネルギー生産のトルコ経済での位置と重要性 * 「原子力エネルギー」

第5单元 トルコにおける工業

- 1 工業立地の必要条件
- 2 トルコにおける工業の立地と発達
- 3 トルコにおける工業の諸部門 * 「トルコにおける工場の分布」

第6单元 トルコにおける交通

- 1 トルコにおける交通に影響を及ぼす自然および人文の諸要因
- 2 トルコにおける陸上交通
- 3 トルコにおける海上交通
- 4 トルコにおける航空交通と空港 * 「交通の重要性」

第7单元 トルコにおける交易

- 1 国内交易
- 2 外国貿易
- 3 通過貿易 * 「我が国の発展における交易の重要性」

第8单元 トルコにおける観光

- 1 トルコにおける観光に影響を及ぼす諸要因
 - 2 トルコにおける観光名所
 - 3 トルコにおける観光の発達
 - 4 トルコ経済における観光の位置と重要性
- * 「トルコにおける観光の諸問題」

内容構成から明らかなように、人文地理とは、日本で言う人文地理とは異なり、人文地理の一分野である人口地理や集落地理を意味している。これらの分野は、単位制教育課程以前では、わずかに『高校地理Ⅰ』の最終単元の後半で扱われていたにすぎない。しかるに、単位制教育課程では人文地理が選択科目とはいえ、その比重の大きさには目を見張るものがある。経済地理が単位制教育課程以前では『高校地理Ⅲ』の大部分を占めていたことを想起すれば、なお一層明らかであろう。

人口地理がこのように重視される背景には、いくつか理由が考えられる。中学校の地理教育の動向や高校の必修教科としての地理から明らかなように、自然環境の理解と環境決定論的な地理的見方・考え方が、地理学習の基礎・基本とされている。こうした地人相関論に力点を置く地理教育では、環境の一要素として総体としての人間が自然環境とどのように関わっているかが、学習の視点を構成することになろう。総体としての人間は人口という量的な把握でその特性がとらえられるので、人口動態や人口分布について詳細な記述がなされるのであろう。

このように、地人相関論を基盤にした地理学習では、人間の自然環境への働きかけである具体的な経済活動を理解するうえで人口に関する十分な学習は不可欠であるが、人口地理が重視される別な要因も指摘しうる。トルコは6118万人(1994)の人口を抱えるとともに、年平均増加率が20%以上に達している。多くの人口を擁するうえに世界平均以上の人口増加率がみられるので、現在の趨勢が継続すると資源に恵まれているトルコでさえ、将来は厳しいものがあると危惧されよう。本書『1』の「序」で人口増加が生産や消費を増加させ、経済活動を活性化させる面もあることが記されているが、過剰な人口増加は問題を引き起こすし、経済発展のためには相応する教育が重要であることも力説されている。畢竟バランスのとれた人口の増加が必要であり、産児制限も必要であることが言及されている。さらに囲み記事「トルコにおける人口増加と諸問題」では、トルコの人口増加を合理的な水準にまで引き下げる必要がある、とまで明言している。

人口の急増だけでなく人口移動についても、社会的要請からその実態について十分な理解を図っていると考えられる。本書『1』の59ページには、センサスが実施された5年ごとの都市部と農村部の人口増加率がグラフで示されているが、1980年代になってからは農村部の人口増加率がマイナスに転じている。さらに、1980年までは農村人口が都市人口を凌駕していたが、80年代には逆転している。農村から都市への人口移動は、スラム街の形成など都市問題を惹起させてきた。適正な国土利用の観点からも、人口分布のこうしたアンバランスを解消しなければならず、囲み記事「トルコにおける移動の原因と結果」においても、この問題についての対策を講ずることが避けられないとしている。

本書『1』第2部の大部分は、集落の歴史を含めて主に都市を取り上げた集落地理であるが、最後の小単元で「トルコにおける住居のタイプ」を設定していることに注目したい。住居は、それが存在する地理的環境にもっともうまく適合した家屋であると考えられるだけに、地理の学習においては地域的特色を把握するうえでも住居の形態を取り上げるべきだと考えられる。居住の形態に影響を及ぼす要因の一つとして経済的要因があるが、本書でもより多く言及されているように、地質の構造、植生、地形、気候といった自然環境の

構成要素に左右されることが一般的であろう。自然環境への対応を示唆する居住は、環境決定論的な地人相関論で展開されるトルコにおける地理教育の象徴ともみなせる。

本書『2』の構成は、明らかに伝統的な産業別の経済地理学習である。国定教科書『高校地理Ⅲ』における経済地理学習と同様、各産業の立地条件、分布や現況、国内経済での位置・地位から、産業の知識・理解を図っている。とりわけ、産業としての観光については、『高校地理Ⅲ』以上にその役割が重視された記述が窺える。「トルコにおける観光に影響を及ぼす諸要因」の項目では、トルコの観光を成立させる要因として、快適な気候条件、自然や史跡の豊富さ、インフラストラクチュアの整備、豊かな民間伝承を挙げ、それぞれを詳述している。さらに、「トルコにおける観光の発達」の項目では、観光化政策の動向を紹介するとともに、観光客数の増加など統計的裏付けを示している。また、囲み記事では、観光化に伴う自然植生の破壊や環境汚染などの問題を指摘し、その対策も提示している。こうした項目が扱われるようになったのも、それだけ観光化が進んだ証左であり、地理教育においても産業としての観光の役割に着目しなければならないことを示唆しているのである。

5. Y. エルドウドゥ (Erdoğan) 著『世界地誌 (Ülkeler Coğrafyası)』(1995年発行, 288ページ)

本書は5年間「世界地誌」用教科書として認定されたものであり、内容構成は以下のとおりである。なお、出版社はKoza Eğitim ve Yayıncılık (アンカラ) である。

第1単元 我々の隣国

- A カフカス諸国 B イラン C イラク Ç シリア
D ブルガリア E ギリシア F 北キプロストルコ人共和国

第2単元 主な中東諸国

- A アフガニスタン B レバノン C ヨルダン Ç イスラエル
D サウジアラビア E クウェート F アラブ首長国連邦
G エジプト H リビア

第3単元 バルカン諸国

- A マケドニア B ユーゴスラビア C ボスニア=ヘルツェゴビナ
Ç クロアチア D スロベニア E アルバニア

第4単元 主なヨーロッパ諸国

- A 南ヨーロッパ B 中央ヨーロッパ C 北ヨーロッパ
Ç 西ヨーロッパ D 東ヨーロッパ

第5単元 主なアフリカ諸国

- A モロッコ B アルジェリア C チュニジア Ç 南アフリカ共和国
D ナイジェリア

第6単元 主なアメリカ諸国

- A 若干の北アメリカ諸国 B 若干の南アメリカ諸国

第7单元 主なアジア諸国

- A 中央アジアの諸共和国 B 若干の南アジア諸国
C 若干の東南アジア諸国 C 若干の東アジア諸国

第8单元 オセアニア

- A オーストラリア

第9单元 国際組織とトルコ

- A 国際連合 B NATO C OECD C 欧州会議(CE)
D EC

国定教科書では、世界地誌が発展途上国を中心に扱う『高校地理Ⅱ』と、欧米諸国と国際組織を扱う『高校地理Ⅲ』に分割されているが、学習する国々は国定教科書と類似している。大きな差異は、旧ソ連関係諸国の扱い方であろう。本書がソ連崩壊後に出版されたものであり、ソ連の記載はみられない。しかし、ソ連に実質代わるものとしてロシアの記述があって然るべきであるが、ロシアについての項目がみられない³⁾。確認のために他の世界地誌教科書(Gürer, 1994)にあたったが、本書と同様ロシアは扱われていない。単位制教育課程の世界地誌学習では、ロシアは学習の対象となっていないのである。主要国別に学ぶ世界地誌学習において、世界最大の国土を有するロシアが対象外となることは通例では考えられないことである。露土戦争や第一次世界大戦などオスマン帝国時代になされた対ロシアの戦争で受けた損害や、中央アジアのトルコ系民族の地域をロシアが植民地化した経緯が、トルコ人の対ロシアの国民感情を悪化させたと考えられるが、ソ連の崩壊により、そうした国民感情が世界地誌学習に反映されたと解釈せざるを得ない。

ソ連の崩壊に伴い、トルコに隣接するアゼルバイジャン・グルジア・アルメニアの3国は、第1单元で最初に取り上げられている。この「我々の隣国」の单元は、Gürer著の教科書でも第1单元として同一の諸国から構成されているが、国定教科書には設定されなかった地域である。他方、中央アジアのトルクメニスタン・ウズベキスタン・キルギス・カザフスタン・タジキスタンの5ヶ国は、第7单元の「中央アジアの諸共和国」で学習することになっている。ただし、Gürerの教科書では中央アジアの設定がなく、中央アジア5ヶ国は扱われていない。

旧ソ連関係諸国以外の点では、本書の方が扱われるページ数が多いため、学習対象諸国が国定教科書よりも若干多いことが差異として指摘できる。しかし、設定されている地域はほぼ同一である。隣接諸国、その周辺の中東諸国やバルカン諸国、そしてヨーロッパやアフリカの国々、さらに遠隔に位置するアメリカ大陸、アジア諸国、およびオセアニアの順に、ほぼ同心円拡大的に扱われている。Gürer著では、中央ヨーロッパでハンガリー・オーストリア・チェコ・スロバキアが、アフリカでナイジェリアがそれぞれ取り上げられていないなど、学習対象国において本書と若干の違いが確認されるが、設定されている地域は同一である。したがって、世界地誌学習で取り上げられる国について若干の幅があるものの、学習対象主要国や区分される世界の諸地域は、本書のようになっていると判断できる。

本書では各地域全体についての説明はなく、各単元とも直接各国の記載からなっている。国定教科書と同様、まず当該国の面積、人口、政体、首都と主要都市、宗教と言語、貨幣単位といったプロフィールが示され、それに続いて国の説明が静態地誌の手法で記述されている。各国とも、位置、地形、気候、植生と陸水、人口、略史、産業・経済、交通、貿易、対トルコ関係の順で記載されている。ちなみに、日本についての記述の概略は以下のとおりである。

アジアの東に位置する日本は、大小様々な島からなる島国である。山がちな地形であり、世界の主要な地震帯に属している。本州には富士山をはじめ3000m級の山がそびえ、人口が多く集中し経済活動の中心となる海岸平野が僅かに広がる。全体としてはモンスーン気候であるが、北部では冬の寒さが厳しいし、南部では降水量が多い。温暖湿潤な気候であり、豊かな植生に恵まれている。信濃川や利根川など、大小様々な河川もみられる。日本は世界でも人口の多い国であるが、家族計画の結果出生率は低下した。人口稠密な国で、人口の大部分が国土の20%のところに、とりわけ東京・大阪・名古屋の周辺に居住している。第二次世界大戦で敗北したが、勤勉で誇り高い国民は、45年間に日本を世界最大の経済力を持つ国の一つにした。先進的な技術を駆使して、生産性の高い農業が行われているが、増産は限界に達しており、増加する人口の需要を満たすにはほど遠い。作付面積の約半分が水田である。畜産業は発達しておらず、肉などの畜産物は海外から輸入される。近代的な装備をもつ漁業は世界でも最大級の生産を誇るが、それ以上に消費量が多く、海外から水産物を輸入している。地下資源に恵まれず、需要の大部分を輸入に依存している。エネルギー危機後の技術革新で輸出力を付け、日本は世界で第一線に躍り出た。近年では精密機器、エレクトロニクス、自動車など、国際競争力のある分野が重視されている。日本は交通の観点からも、世界で最も発達している国の一つである。自動車網とともに、鉄道網も発達している。近年では航空網も大きな発展を達成した。日本の貿易額はアメリカ合衆国、ドイツに次ぎ世界第3位であるが、貿易収支が黒字という珍しい国である。主な輸出先はアメリカ合衆国、ドイツ、韓国などで、輸入先はアメリカ合衆国、インドネシア、オーストラリアなどである。日本とトルコの関係は、オスマン帝国期にまでさかのぼり、1890年にはエルツウルル号が日本を訪問した。共和国期にも続いている友好関係は、近年各分野で発展した。トルコは日本から各種機械類や化学製品を輸入し、日本へは主にたばこ、セメント、ヘーゼルナッツなどを輸出している。

こうした日本の記述を例として示せるように、世界地誌の教科書は静態地誌の手法で各国を記述することに終始している。Gürer著の教科書においても、概ね同様な手法で各国の紹介がされており、高校の世界地誌学習は、トルコにとっての主要国について網羅的な説明が教授されることで、進行していると推察できる。

6. 高等学校地理教育の動向

教科書が国定から検定に代わっただけでなく、単位制教育課程が導入された高校の地理教育は、中学校と比較するとその変化は大きい。人文・経済地理、世界地誌の学習は必修から外され、完全に選択となった。しかし、選択の地理については「Ⅱ 地理教育カリキ

ユラムの変遷」で述べたように、履修される可能性はかなり低い。したがって、高校地理教育は必修分野である自然地理と国内地誌の学習に、重点化してきたと判断できる。

自然環境についての学習が地理教育の基盤を構成していることもあり、自然地理分野は日本の地学的な内容をかなり包含している。第二次世界大戦後社会科の一科目・分野として再出発した日本の地理教育では、自然地理分野は社会認識に必要な人間生活の単なる背景として位置付けられたため、自然環境の構造理解は地学にゆだねられた。しかし、地理が一教科として扱われている国では、一般に自然環境それ自体の理解をも、地理学習の主要な目的とされている⁴⁾。一教科として地理学習を構想しているトルコは、まさにそうした類型の教科構造を採用している。実際、選択科目として地質学は設置されているが、必修教科の理科には、日本の地学のような内容は含まれていない。

上述の点から当然のことながら、地形の形成過程に関する説明など、一般原理に関わる学習がなされているわけだが、それと対応して具体的なトルコの自然環境に言及されている点にも留意したい。高校地理教育のもう一方の基盤となる国内地誌で、各地域の説明において自然環境が先に記述されているばかりか、地誌学習の事前にそうしたトルコの自然環境を理解させることは、より一層環境決定論的思考を促すことになると推察できるからである。

自然環境についての知識・理解といい、環境決定論的思考といい、トルコにおける地理教育では、自然環境重視が近年の高校地理教育の傾向と考えられる⁵⁾。

V おわりに

教科書を通じてトルコにおける地理教育の動向を考察してきたが、中学・高校を通じて共通する傾向を若干析出できよう。まず第1に、自然環境重視の地理学習を指摘できる。国内地誌の記述で自然環境に関する記述から始まる静態地誌の手法が定式化されているばかりか、高校では人文地理・経済地理分野が選択であるのに対して、自然地理分野は必修となっている。全教科の中で地理学習に求められているものは、地誌とともに自然環境の理解、さらには環境決定論的思考であると判断できる。

第2は国内地誌の重視である。中学・高校でほぼ重複して国内地誌の学習が行われているとおりである。発達段階によりその深まりは異なるが、中学・高校とも静態地誌による学習であることに変わりはない。せいぜい高校でより詳細な知識を獲得させるだけの違いにすぎない。繰り返してまで徹底して国内地誌を学ばせなければならない理由は、国内地誌学習によって目指される国土認識が必要不可欠であり、重要性を帯びているからであろう。換言すれば、国民としてのアイデンティティ形成で果たす地理教育の役割が、トルコでは大きいということである。

国内地誌重視と表裏の関係から、世界地誌学習は軽視されるようになったことが、第3の傾向であろう。1980年代までは高校2・3年生で世界地誌を学習していたが、その後世界地誌学習は選択となっている。外国地誌については、中学で学ぶトルコ系民族の居住する国・地域についての地誌学習のみが、中学・高校での地理教育の対象となっているにすぎない。トルコ系民族の世界からしか、世界像が形成されないことになりかねないが、地

理教育の目的がトルコ系民族世界の理解と国土認識から、国民としてのトルコ人意識を育成することであると解釈すれば、そうなることは当然の帰結であろう。

これらの結論は、畢竟教科書分析による推論にすぎないから、この分析の証左を追究しなければならない。すなわち、今後の課題として以下の研究がなされなければならないであろう。まず、本論では地理教育の目標を環境決定論的思考と国土認識の育成とする結論を得たが、トルコにおける地理教育の目標・目的はそれだけなのかどうかという点である。つまり、トルコではどのような地理教育論が論じられているのか、その思潮について検討しなければならない。次は、トルコ系民族地域の理解が国民としてのアイデンティティの形成と深く関連しているが、パン＝トルコ主義の動向が教育の思潮に影響を与えているのかどうか、影響があるとすればどのようにか、といった課題が考えられる。地理教育の観点からは、地誌学習にパン＝トルコ主義が具現化されているかどうかを検討することであろう。最後に、国土認識が国民としてのアイデンティティ育成を目指したものであると想定したが、どの程度アイデンティティ形成の要因となるのか、実証しなければならないであろう。

注

- 1) 「Ⅱ 地理教育カリキュラムの変遷」で記したように、選択の地理が履修される可能性が低いので、発行部数それ自体が少ないと考えられる。また、必修の地理が自然地理とトルコ地誌を主な内容としているうえに、「トルコ人文および経済地理1・2」の教科書も分析対象としているので、地理教育の動向を学習内容から考察するうえでは、「トルコ地理」の教科書がなくとも全体像は把握できると考えられる。
- 2) それでも、各地域・地方の記述の中で、トルコ革命に関連する各地域での歴史的偉業が紹介されている。
- 3) ルーマニアとモルドバを扱っている「東ヨーロッパ」の最後のページに、本書唯一の囲み記事として「ロシア連邦」があるが、他国のような項目としての扱いはされていない。
- 4) 例えば、地理を独立教科としているイギリスの『全国カリキュラム・地理』では、地理の学習到達目標は5項目からなるが、その一つである「自然地理」では、地形の形成過程や気象現象の説明など、日本における理科の地学分野の学習をも包含している（中井・岩田，1996）。また、スウェーデンは1992年に高校の独立教科として地理を復活させたが、深刻化する環境問題への対処から、従前の社会科に属していた人文地理と理科に属していた自然地理を統合させるためであった（村山，1996）。
- 5) 筆者が1996年の夏にトルコを訪問した際、現職の地理教師から、単位制教育課程が、導入後3年を経て廃止されたことを知らされた。その理由は単位制で選択授業が多く、生徒が自由になりすぎて遊びすぎた結果、単位制導入以前と比較して、大学入試の成績が低下したからであるという。新課程では、高等教育への進学との関係で普通高校においては2年生から、自然科学系・国語数学系・社会科学系・外国語系・芸術系・スポーツ系に分かれ、必修科目のほかに、それぞれの系における必修科目・選択科目や全くの選択科目が設置されている。単位制教育課程と比較すると、進路に応じた必修科目が増加していることに特色が見出される。単位制教育

課程と同様に、「地理」は1年生で週2時間の必修となっている。社会科学系では2年生で「トルコ地理」と「世界地誌」が、3年生で「トルコ人文および経済地理」が、それぞれ週3時間の必修となっている。国語数学系では、2年生で「トルコ地理」が、3年生で「トルコ人文および経済地理」がそれぞれ週2, 3時間の必修となっている。外国語系では2年生で「トルコ地理」が、3年生で「トルコ人文および経済地理」が、それぞれ週3時間の系における選択科目となっている。新課程においても、単位制教育課程の教科書が対応する科目でそのまま使用されているうえ、全生徒の必修科目は「地理」だけであるから、新課程においても基本的には、高校地理教育の目標・構成は単位制教育課程のものが継続していると考えられる。

引用文献

- 中井修・岩田一彦(1996)：イギリス『全国カリキュラム・地理』の解題と全訳。社会科教育論叢 (全国社会科教育学会年報), 43, pp.41-89.
- 村山朝子(1996)：スウェーデンにおける地理教育の構造と理念 -新しい教科地理は何をめざすのか-。新地理, 44-1, pp.1-14.
- Gürer,M.(1994)：Ülkeler Coğrafyası 1. (世界地誌 1), SE&PA Yayıncılık, Ankara, 248p.